



統計から社会の実情を読み取る

第97回 「人生は自由になるか」の国際比較

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。勸国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。元立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、「社会実情データ図録」サイト (<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>) を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著書に、『統計データはおもしろい!』(技術評論社、2010年)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年)、『なぜ、男子は突然、草食化したのか:統計データが解き明かす日本の変化』(同上、2019年)等。PRESIDENT Online にて連載を執筆中。



社会の自由度というより人生態度を示す調査

代表的な国際意識調査の世界価値観調査における「自分の人生をどの程度自由に動かせるか」という設問に対する回答結果を、今回は、見てみよう。設問は1から10までの段階で回答するようになっているが、図1には各国の平均点を大陸別にあらわした。

「人生が自由になる」と考える程度について日本人が世界で最低であることから、この調査結果は、日本ほど抑圧的で不自由な国はないことを示すデータとして引用されることが多いようだ。

しかし、国別の社会の自由度の比較をここから導き出すのは無理がある。例えば、この調査の結果から、北米・中南米で、メキシコは自由の国で、チリは不自由の国、米国はその中間などと言ったところで何か意味があるだろうか。ヨーロッパ・中央アジアについて、ルーマニアは最も自由な国でロシアは最も不自由な国というのも空しい。

この調査結果は、各国の自由度や抑圧度をあ

らわしているのではなく、むしろ、各国民の人生態度をあらわしているに過ぎないと考えるのが妥当だ。

ラテンアメリカ人のうち、メキシコ人は何でも明るく考えるがチリ人は少し深刻に人生を考える傾向にある。しかし、ラテンアメリカ人は、他の大陸の国民と比較すると、人生に対して概して明るく考える傾向がある。人生態度としては、ラテンアメリカで最もシリアスなチリ人でも、アフリカや南アジアで最も楽天的な国民と同程度の感じ方にすぎない。

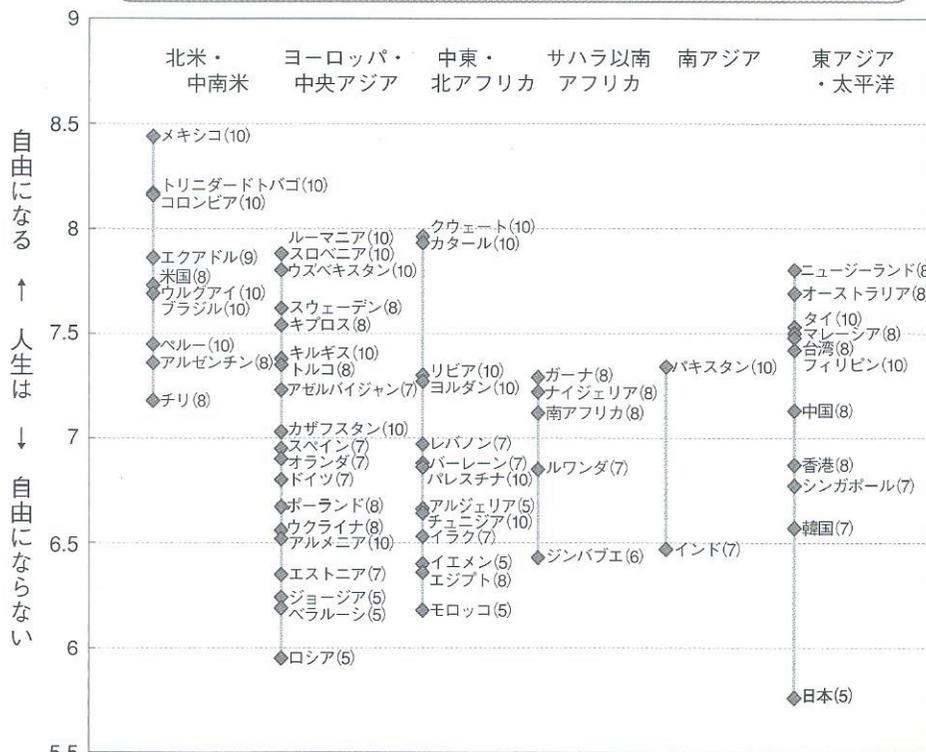
こんな風に結果をとらえると、この調査結果も、なかなか味わいがあるということになる。

日本の結果は、東アジア・太平洋諸国の中でもそうだが、世界全体の中でも、最も低い点数となっており、確かに、日本人の人生態度は、よく言えば慎重、悪く言えば暗いと言わざるを得ない。自分の人生を自由に動かせるかと思っていて、後で、うまく行かなくて嘆くよりも、最初から、うまく行かないかと思っていれば、何かの幸運でトントン拍子に行けば、これほどうれしいことはないと思える。こんな人生態度なのではないだろうか。

図1 人生は自由になるか

あなたは、ご自分の人生をどの程度自由に動かすことができるとお考えですか。
1から10までの数字で当てはまるものを1つお答え下さい。(1つだけ○印)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
[人生は全く自由にならない] [人生は全く自由になる]



注) 60か国の調査結果。1～10の段階別回答の平均点。国名の後のカッコ内数値は最頻値の回答番号。
資料) 世界価値観調査 2010 年期 (2016.6.22)

回答分布による考察

上の平均点の元になった1から10までの段階の回答分布については、図1には、最頻値の(最も回答が多かった)回答番号を掲げておいた。10(全く自由)が最頻値の国が60か国中21か国とけっこう多い点が目立っている。「ヒトの人生は“もともと”自由だ」という考えが広まっていることがうかがえる。一方、先進国では、10が最頻値の国は存在せず、途上国と比べて「自由」の要求水準が高いこと、あるいは人生に対する懐疑的な考えが強いことをうかがわせている。

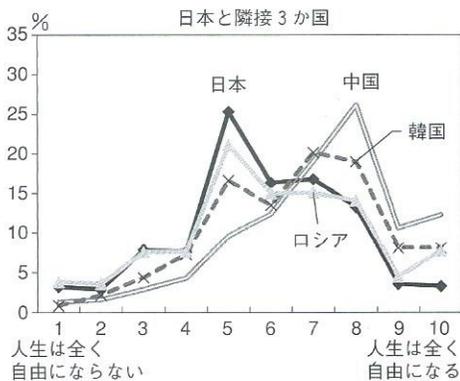
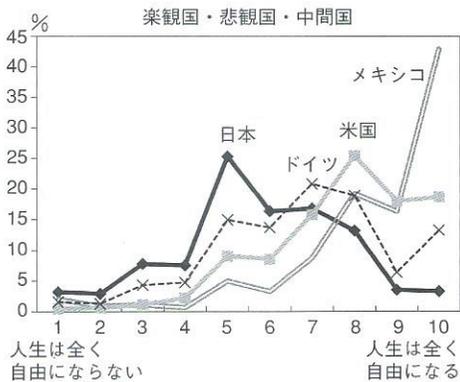
一方、最頻値の回答番号は5が最低であり、

それ以下の国はない点も目を引く。世界中で奴隷制を廃止した成果と言えるのかも知れない。

さらに1～10の具体的な回答分布を最も悲観的な日本と最も楽天的なメキシコ、及びその中間のドイツと米国という四つの国について見てみよう(図2参照)。

日本の場合、5が約25%と最も多くの回答を集めているのに対し、ドイツは7が最も多く、米国は8が最も多く、メキシコは圧倒的に10が多くなっている。日本でも過半数は5以上なのであり、自由にならないと悲観しているばかりでもなさそうである。

図2 「人生は自由になるか」の回答分布



資料) 世界価値観調査 2010 年期 (2016.6.22)

図2では、さらに、日本を隣国の中国、韓国、ロシアと比較している。日本と一番近いのはロシアであり、偶然であろうが、不思議なほどよく似ている。次に、韓国も回答分布パターンが日本と似ているが、韓国の場合は、楽天的な方向にシフトしている。一番似ていないのは中国であり、中国の場合は8の回答が一番多いのが特徴である。中国は米国と類似したパターンである。政治体制など様々な局面で対立が目立つ世界の2大大国である米中は、国民の人生態度的には案外似ているのではないだろうか。

男女いずれの方が「人生を自由」と感じているか

最後に「人生は自由になるか」の意識の男女

差の状況を見てみよう。これまで述べたように、この設問に対する国別の回答は文化的なバイアスを免れ得ないので、単純に各国社会の自由度の指標と見なすことはできない。しかし、同じ国の男女は共通の文化や価値観をもっているはずなので、男女差の方はそれぞれの自由度の違いをむしろはっきりと示していると考えられよう。

図3には、各国における男女別の平均点の差を図1と同じように大陸別に示した。

平均点の男マイナス女の値を g とすると、 $g > 0$ 、 $g = 0$ 、 $g < 0$ の国数は、それぞれ、43、2、15であり、世界的には、男性の方が女性より「人生は自由である」と感じている国が多い。男女いずれの方が人生を自由だと感じているかによって判断するとすれば、大きく捉えて現代世界はやはり男性優位だと言えよう。

世界の中で男性が女性を大きく上回っている点で目立っているのは、パキスタン、パレスチナ、アルジェリア、イエメン、アゼルバイジャンなどのイスラム諸国である。イスラム諸国を除くとアルメニアやインドで同様の状況にある。東アジア・太平洋では、イスラム国のマレーシアが最も男性優位であり、中国がこれに次いでいる。

同じ中華系の国でも、男性優位の中国と女性優位の台湾や香港では状況が大きく異なっており、歴史的経緯や社会の在り方で男女差の様相は大きく異なってくるのが分かる。

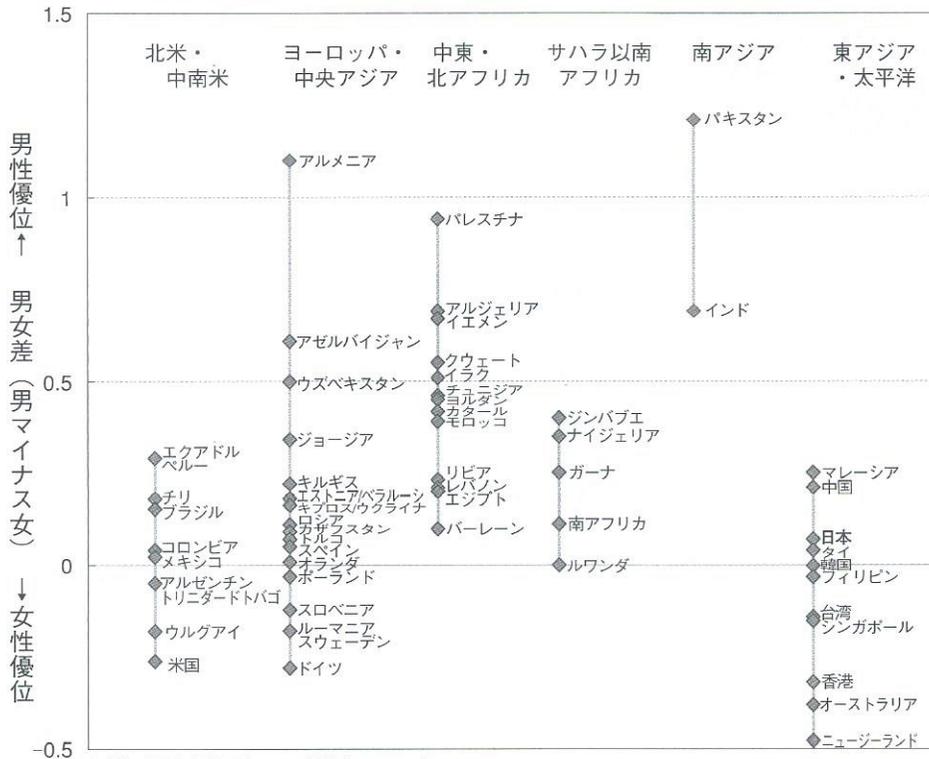
日本の値は0.07であり、メキシコ、オランダ、ルワンダ、タイ、韓国などと同じく、ほぼ男女差がない点の特徴となっている。

欧米諸国では、米国、ドイツ、スウェーデン、オーストラリア、ニュージーランドといったプロテスタント国を中心に、女性優位の国が多い点が目立っている。日本もこうした国と比較する限りは男社会と見なさざるを得ないだろう。ただし、ここで調査対象となっていない欧米主

図3 「人生は自由になるか」の男女格差

あなたは、ご自分の人生をどの程度自由に動かすことができるとお考えですか。
1から10までの数字で当てはまるものを1つお答え下さい。(1つだけ○印)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
[人生は全く自由にならない] [人生は全く自由になる]

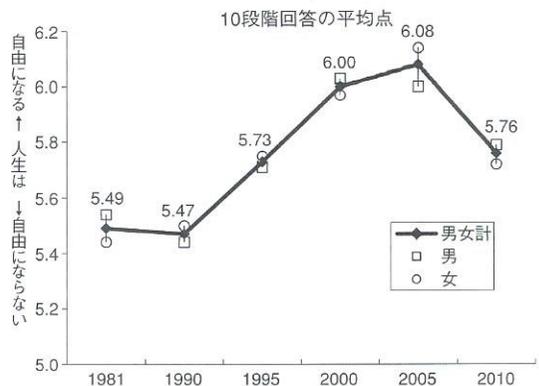


資料) 世界価値観調査 2010 年期 (2017.3.12)

要国について、欧州価値観調査 (2008 ~ 09 年) における同じ設問の男女差を調べてみると、英国、フランス、イタリアは、それぞれ、-0.35、0.00、0.53 となっており、カトリック国と比較すると日本は、特段、男性優位とは言えないことになる。

日本について、参考までに、図 4 に 1981 年からのほぼ 5 年ごとの結果を示した。男女計では 1990 年から 2005 年まで「人生は自由になる」という意識が高まったが、2010 年には再度低下している。その間、男女差はプラスになったり、マイナスになったり、男女の優位性に明確な傾向はないようである。

図 4 「人生は自由になるか」の推移 (日本)



資料) 世界価値観調査各期 (2017.3.12)